



讃仰講演会 真城 義磨 氏（四国教区善照寺住職）

2014年2月21日

「念仏とお内仏」

【灯を伝える】

岡崎教区の「親鸞聖人七百五十回御遠忌法会」に先立ちましての讃仰講演会ということでもありますけれども、私たちの先輩方からずっと、年に1回、必ず報恩講をお勤めし、そして50年ごとにこうやって御遠忌をお勤めしてきておるわけであります。

そのことの意味や中身はどういうことなのだろうかということを確認するということが、この御遠忌をお勤めするという事の中で、とても大事な事ではないかと思うことであります。

言ってみれば、七百五十年前にお浄土へ還って行かれた親鸞聖人です。親鸞聖人が関東におられたところに、親鸞聖人に触れた方から言えば800年たつわけですね。その間、親鸞聖人のお人柄に触れて、あるいはお言葉に触れて、それまで生きてきた何かが大きく変わるといいますか、人生の方向性というか、そういうものを見直された方々、親鸞聖人に灯を灯してもらった方々が、その灯をまた有縁の方にお伝えしていくということがずっと続きながら今日ここまで来ているということでもあります。



簡単に言ったら、結婚式の最後にキャンドルサービスがありますが、ああいうものです。親鸞聖人からキャンドルを点火していただいた方が、その灯をずっと抱えて生きていながら、またお出会いされた方々にその灯を分けていかれる。

その歩みの中、歴史の中で、私たちの先輩方が、親鸞聖人の教えに出会った者が感じたこと、気になること、それを良い形で次に伝えるためにはどうしなければならないのだろうか、いろいろお考えになったのではないかと思うことであります。

親鸞聖人が法然上人にお出遇いになられて、法然上人から教えてもらったことは何か。一言で言うと、これは極めて単純明快でありまして、「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」。こういうことですね。ただ、念仏して弥陀にたすけられまいらすべしということでもありますから、いわば念仏一つだけでいいわけでもあります。

親鸞聖人が法然上人にお出遇いになられて、法然上人から教えてもらったことは何か。一言で言うと、これは極めて単純明快でありまして、「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」。こういうことですね。ただ、念仏して弥陀にたすけられまいらすべしということでもありますから、いわば念仏一つだけでいいわけでもあります。

○ 御遠忌通信



【本尊を中心に、聞法する場】

しかし、皆さんもご経験がおありではないかと思えますけれども、念仏だけだと、どこで何をしておっても念仏はできるわけであります。念仏というのは仏を念ずるということですから、この念というのは、元のインドの言葉で言うと、サティーといいますけれども、これは意識の中にとどめるということなのです。

ですから、親鸞聖人の教えに触れた方々は、親鸞聖人を始め、念仏生活しているということは、いつも阿弥陀さまという仏様が意識のどこかに共にあるということであります。

けれども、私たちはそういう漠然とした、例えばそういう状態だとお寺もない、そういうときに、念仏だけでいいと言われてもというような中から、具体的な何かがあればというような思いも出てきたのでしょう。親鸞聖人に灯を灯してもらった方々から、またどんどん次へとつながっていく間に、私たちが人間として生きておる限り、念仏一つと言いながら、目の前のさまざまなことに振り回されている間に、念仏どころではなくなってしまって、勝つか負けるか、得するか損するか、人からどう言われているのかみたいなところに振り回されている間に、我を失うといいますか、念仏している私から離れていくといいますか、そういうことになりがちであります。

親鸞聖人の教えに触れた方々は、人間というものは、その人間の知恵だけに任せておいたら、いくら一生懸命よかれと考えても、そこで考えたことはろくなことになっていかないということを身に染みておられた。それだけご自身のこころのありようというものに気付かれた方々の歴史でもあるわけです、真宗門徒の歴史というのは。

それで、真宗門徒の先輩方の中から、どういうことがそこに起こってくるかというと、人間が生活しておるところには必ず、今で言えばお寺がなくてはならないと考えた。始まりで言えば念仏道場ですね。つまり本尊を安置し、法を聞く場がある、そういう開かれた場所。そういうものが人間が生活している限り必ず身近に必要なのだということを、われわれの先輩方はつくづくお感じになったのだと思います。

だいたいお寺というものは、もともとは有力者、あるいはお金持ち、権力者、支配者が建てたものであります。あるいは、志のあるお坊さん方が人々に勧進といって、寄付をお願いして回って、そしてお寺をつくる、つまりお坊さんがお寺をつくる、あるいは権力者、有力者がお寺をつくる、こういうかたちであります。

親鸞聖人から灯をともしていただいた方々の子孫というか、そこからずっと連なった、その流れにおる者は、自分たちがお金を出し、労力も出して、自分たちが生活しておる場のすぐ近くに、こういうものがどうしてもなければならぬのだ。こういうものがない生活では、人間はろくなことになっていかないという、人間をきちっと見る目といいますか、そういうものを親鸞聖人から灯していただいた灯と共に、いただいていたわけであろうと思います。

○ 御遠忌通信



人間が生活する中で本尊、何が私の人生の中で根本的に尊いということになるのか、その真実の教えというものに聞いていかなければ、人間が自分の頭だけでよかれと思って考えて、こうなったらいいだろうと思っては進んでいくことになるわけです。

よかれと思って一生懸命やって、だいぶ良くなって近づいてきたかなと思っておっても、しばらくすると、こんなはずではなかったのにということを繰り返す。そうやって、どんどんお寺の原型ができていった。もともとはお寺というよりも、本尊と聞法ができるということが中心であって、お坊さんがそこにいるかないか、そういうことは中心ではなかったのですね。

【お内仏の前に座る】

私たちの先輩方は、自分たちが住んでいるところにお寺ができていくだけではなくて、さらに進んで、自分の家の中にお寺を建てた。それをお内仏といいます。自分の家の中に本尊をお迎えし、聞法をする場というものを持ったわけです。その空間のことを仏間といいます。

最初のころは、ご本尊は阿弥陀さまの形を木に彫ったようなものではありません。本山の御門首から名号「南無阿弥陀仏」とか、「歸命尽十方無碍光如来」とか書いていただいて、それを表装して壁に掛ける。壁に掛けた場所が仏間になるわけです。

そのご本尊の前にお香を焚く香炉を置き、向かって左側には花をお供えする、そういう形が整ってくるわけですね。その掛ける場所がだんだんと床の間になっていくわけです。床の間があってそこに掛けたのではないのです。掛け始めて、その掛けるところが床の間になっていくのです。日本の家屋の文化もつくっていくのです。



本願寺の八代目の蓮如上人という方

をご存じだと思います、十何年前に五百回忌の御遠忌が勤まりましたけれども。蓮如上人という方は、このご本尊の前に座るといことは、とても大事なことです。同時に、その場で親鸞聖人のお言葉に触れなさいということをお勧めになられた。親鸞聖人のお言葉に触れるというのは、どのお言葉に触ればいいのか、いっぱいありますから。

親鸞聖人がお書きになったものの中で一番中心的な書物に『教行信証』というものがあります。これは大変膨大な書物でありますし、大変難しい書物であります。その中の途中に出てきます、「正信念仏偈」という部分を抜き出されました。漢字7文字の120行、840文字あります。それを抜き出

○ 御遠忌通信



されて、そしてそれを木版、板に一ページ四行を一枚の板に彫って、ちょうど年賀状の版画みたいなもので、字を彫って、そしてぺったんぺったん印刷して、製本して、『正信偈』の本というものが出来上がっていくわけです。

ヨーロッパでグーテンベルクという人が活版印刷を発明した頃の話ですけれども、日本では真宗門徒がもうすでに本になった冊子というものを持つようになったのです。

そして、ご本尊さまの前で『お正信偈』のお勤めをしましょう。お念仏、ご和讃をお勤めしましょう。こういうことが勧められていくわけですね。

そうすると、そこに明かりが必要になりますから、今は鶴亀のこういう形になっていますけれども、これは後にそうなるわけですが、向かって右側にともしび、燭台が置かれてということ、三具足という基本が出来上がっていくわけですね。それが、時代を経ていく間に、だんだんと今のような箱形の扉の付いた仏壇形式になっていくわけです。最初からあの形ではないわけですね。

皆さんの家にありますお内仏、お仏壇の扉がありますね。その扉の向こう側とこの本堂の扉の向こう側とは、つまり内陣とは同じもの、同じことを表しておるわけですね。家の中にお寺を建てたというのは、そういう意味であります。扉の向こう側は何を表しているかということ、お浄土を表していません。

私たちの先輩方は、ただ口で念仏を称えるというだけでは、それはそれでいいのですが、人間というのはそれだけは何となく頼りないというか、具体性がないというか、そういうふうになってしまいがちですので、そういう場を設けて、そこへ定期的に座って、本尊を礼拝し念仏をとえ、親鸞聖人のお言葉にふれる。しかも私たちの先輩方は、困ったことがあったら仏さまの前に座りなさい、悩み事があったら仏さまの前に座りなさいとおっしゃらない。

困ったら座る、悩んだら座るということは、悩みの解決の方が座ることより大事なわけですね。もっと言えば、仏さまを私の悩みの解決のために使おうかという話です。そうなるから、そうではないのだよ。悩みがあろうがなかろうが、今行き詰まっておろうがどうであろうが、困っておろうが困ってなかろうが、定期的にご本尊の前に身を置きなさい。

朝晩でもいい、朝だけでもいい、夕方だけでもいい。定期的にご本尊の前に身を置く。そういうことがなければ人間は、最初に言いましたように、ろくなことになっていかないということになります。

【私の都合～祈りと呪い】

というところまでお話をして、振り返ってみてほしいのでありますが、今皆さん方の家のお内仏は、そういうお内仏でありましょうかということです。いつの間にかお内仏というものは、お寺の人が衣を着てお参りしてくれたときに必要な道具といいますが、設備というかになってしまっている。明日はお参りに来てもらう日だからきれいにしておかないといけない。

○ 御遠忌通信



あるいはお寺も、報恩講が勤まるから、永代経が勤まるからという行事に、その行事というのは、本来は地域みんなの行事なのですけれども、お寺が主催してお坊さんたちが、やるから来いよと言うので行くようになっていないかということでもありますね。

ですから、私たちが人間として生きていくために、こういうことがなかったらろくなことになっていかない。ろくなことになっていかないというのはどういうことかというのをもう少しお話しします。

私が困ったら、悩んだら仏さまのところに行こうというのは、私が困っているというのは、中身は何かというと、私の思ったとおりに進んでいかないということです。私の都合よく物事が進まないということです。

そこを一回も、問うことも振り返ることもなく、私の思ったとおりに好都合にものが進むように、仏さん、頼みますというふうに、私たちは宗教に対してそういう姿勢になりがちでありますね。

今私は、瀬戸内海の小さい島に住んでいるのですけれども、しばらく京都におりました。県立高校の入試がこれからですよ。そうすると、まだうちの子や孫が、今度の入試がうまくいくだろうかどうかと不安なご家庭もたくさんあるのではないかと思います。

愛知県で受験の神様といったらどこになるのか知りませんが、京都にはブランドの神様がいます。北野天満宮。あれも不思議な話で、菅原道真が一度でも試験を受けたのかと思いますけれども、いつの間にか受験の神様ということになりまして、全国からお参りに来るのです。お参りというかお祈りに。

本当に遠いところから、宿をとって、新幹線に乗って来るのです。両親は忙しいから、じいちゃん、ばあちゃんが代わりに来るようなケースも多い。あんたらは忙しいから、わしが行って、神様に頼んできてやるわいというようなものですよ。

わざわざ泊まる場所を予約して、新幹線に乗って行って、今度の試験でうちの孫が志望校に合格いたしますようにと一心不乱に祈るだけではないですよ。必ずお賽銭とか、絵馬を奉納するとか、お守りを買うとか。

面白いもので、神様というものはお金とどう関係があるのだろうと思いませんか。神様というのはお金を超越しているのではないかと思いますけれども、だけどわれわれが神様のところへ頼み事に行くときは、必ずお金で気持ちを表そうとするわけです。

それはどこでもある光景のように思うかもしれないですけれども、ちょっとそのお祈りの中身というものを一緒に考えてみたいと思うわけです。今度の入学試験でうちの孫が受かりますように。わざわざ遠いところから宿をとって、新幹線に乗ってお祈りしないといけないということは、順当に行けば、合格点より下の、落ちる子ですよ。そうでしょう。

心配ないよという子だったら隣の氏神さまで十分なわけです。それを受験の最高ブランドの神様のところまでわざわざ行かねばならないということは、いわば奇跡を起こさないといけないわけですか

○ 御遠忌通信



ら。

そうすると、いわば学力的に順当なところは、この合格点の少し下のところにおる子が、お祈りの内容は、この合格点よりも上になりますよということですね。これは抽選ではなく学力テストですから。学力一番の子から順番に、合格基準から上はだいたいもう予約で埋まるのです。順当なところで受かる子がだいたい想定されているわけでしょう。

つまり、空いている席がないところに、うちの孫を押し込まねばならない。そのためには、本来順当なところでいけば受かるはずの子に、下に回ってもらわないといけないわけです。

そうしてうまく空いた席に、うちの孫がピンポイントでそこにはまりますよということのが、うちの孫が受かりますよということの中身であるとするならば、これは祈りでしょうか、呪いでしょうか。我々は祈っているつもりが、実は呪っている。夜中にテレビを見ながら、昨日、キムヨナが滑っていたら、こければいいのにと念力を送っていませんか。そういうことを我々は当然のようにしているのではないか。

神さま、仏さまというのも、そういうことを応援してくれるためのものだというふうに思うようになっていないか。人間は放っておくと、すぐそうなるからということ、私たちの先輩方はよく身に染みておられたに違いないと思います。だから、本当に尊いこと、本当に大事なことに戻してもら、定期的に。そうでないと、こういうことを忘れると、我々はどこに飛んでいくか分からない。

【本当に尊いということ】

現代社会というものは、特に日本の現代社会というものは、こういうものをそっくり忘れてしまっで進んできたわけです。その歩みは人間の知恵というものに全幅の信頼を置いて、この人間の知恵をはたらかせさえすれば、知恵と努力によって世のなかはよくなるはずであると思って進んできたわけであります。

ですけれども、残念ながらというか、根本的に私たちの知恵というものは、本当のことを見抜くということができない知恵であります。あるいは、見通すということができない知恵であります。だから、よかれと思って、こうやってやったらよくなるはずだと思って進んできて、出来上がってみると、こんなはずではなかったということになる。

一番分かりやすいのが原子力発電ですよ。今まで、これこそが人間を幸せにしてくれると思って進んできた。いわば極楽の象徴、天国の象徴のようなものが、一瞬にして地獄の象徴になっていくわけです。人間を一番幸せにしてくれるはずのものが、人間を一番苦しめることになった。

この人間の知恵から生み出された典型的なものが科学技術と経済です。科学技術と経済が進歩、発展することによって人間は豊かになるはずだ、幸せになるはずだと思って進んできたわけですが、少なくとも現代日本でいえば、今人間を苦しめているのは経済と科学ではないですか。

○ 御遠忌通信



人間のための経済だったわけです。人間を豊かにするための経済だったのに、いつの間にか暴走してしまった。今人間は経済のための材料、すなわち人材になってしまった。材料ですから、必要なときにいるだけ調達して、いらなくなったら、もういらぬのです。

それをどう合理的にするか、効率的にするか。人間よりも経済の方が大事になっている。本当に尊いということが分からなくなると、そういうことになるのですね。結局どうなるか。ご覧の通りです。

もし皆さんが、あなたは人生を生きていく中で、何を大切にしながら生きていますか、毎日これを大切にしようと思ってこころ掛けていることは何ですかと聞かれたら、何とお答えになりますでしょうか。

いろいろな新聞社とか、メディアとかがアンケートを採りますね。日本で採るとベストスリーはだいたい、順番は入れ替わることはありますけれども、上位三つはだいたい、どこがいつ採っても一緒なのです。

あなたが生きていく中で、このことを常に大事に考えているというのは、まず「健康」、それから「お金」と「家庭円満」ですね。だいたい共通するのはこういうことです。人生の関心事のかなりは「健康」ではないですか。「健康」のためだったらどんなことでも、金を使うことも惜しくなければ何をするのでもという、それこそ「健康」のためなら死んでもいいというぐらい、すごいですよね。



日本人は「健康」のためだったら惜しまず金を使うということが分かっていますから、テレビをつけたら健康

食品、サプリのコマーシャル、ここ3時間そういうものがなかったなというのがないぐらい、1日に1回や2回ではないでしょう。特に昼間とか、あるいは夜中とか、見ていたらほしくなって、お試しセット。

歴史が始まって以来、現代日本のお年寄りぐらい、カタカナの薬や健康食品の名前をよく知っている時代はないのではないかと思いますね。テレビをつけても、ヒアルロン酸、グルコサミンという声を聞かない日はない。ポリフェノールとか。

また詳しいですね。油一つ取っても、私も門徒さんと話していたりして、さりげなくつい油の話をしたりすると、それは不飽和脂肪酸だから駄目とか、リノレン酸とリノール酸は違うとか、いろいろいっぱい教えてくれます。すぐ忘れませんが。すごく詳しい。

○ 御遠忌通信



水を飲めと言う人もいるし、飲むなと言う人もいるし、いろいろであります。人が2、3人集まったら、何がよく効くかという話をしているぐらい、健康、健康、健康です。そんなことはないですか。

それからもちろん、「お金」。それから「家族仲良く」ということであって、これは現代だけではないです。日本では昔からこうです。なぜ昔からそうだということが分かるかという、ちょっと大きな神社に行ったら、御利益のお品書きといたら怒られますが、ああいうのを見ていると、どこでも必ず共通してあるのが、無病息災、商売繁盛、家内安全。これを基本的に押さえた上で、うちの神社はさらに加えて交通安全とか、火の用心とか、いろいろあるのですけれども、この3つだけは押さえておかないと収入に差し支えるとか、そういうことがあるわけです。

【とりあえず～それからどうするの?】

だけど、例えば、皆さんのお孫さんが、じいちゃん、ばあちゃん、健康には気を使って、健康食品をいっぱい食べて、サプリメントも飲んで、ウォーキングもして、必死で健康、健康とやっている、その姿を見て、「おじいちゃんもおばあちゃんも、健康のために一生懸命やね」とか言ってくれる。

孫さんに、「おばあちゃん、健康になって、それからどうするの」と聞かれたら、何とお返事されませんか。何を実現するための健康なのか。逆に言えば、健康を損ねたら、もうそれは不幸に間違いないのか。それはもう幸福とは言えないのか。

お金もそうですね。お金のためにあらゆるものを犠牲にし、皆さんがお金の苦勞もしてこられた。もちろんそれは、ないということの苦しさもご存じだからだろうと思いますけれども、お金、お金。そして、そこそこお金が手に入って生活しておるわけです。衣食住に困ることもなくなった。

今日、ここに来られた方の中で、着るものを人に借りた人はいないでしょう。たいがい自分専用ですよ。食べるものもそうです。ここ3日食べていないという方はおられないでしょう。ここ3日食べ過ぎの人はいくらでもいる。

あれも変なものですね。コマーシャルを見ていたら、食べたものを吸収させないお茶とか、脂肪の吸収を遅れさせるお茶とか。それなら食べなければいいのにとおもいますけれども、ああいうものを飲みながらでも食わずにおれないというのが、すごいなと思いますね。昔のローマ帝国時代の貴族が、吐いて戻す部屋を用意して、食べて満腹になったら戻してというのによく似ている感じもしますけれども。

孫さんが、「お金のために一生懸命頑張ってきたね。そこそこお金も儲かってよかったね。それでどうするの」と聞かれたら、さてという感じになりませんか。

つまり、これはみんな「取りあえず」なのです。私の人生で本当に大切なことははっきり分からないから、今分からなくても、いずれ分かるかもしれないので、「取りあえず」健康でなかったら。「取りあえず」お金はいる。「取りあえず」家族がもめていたらいけない。それはそのとおりだけど、「取

○ 御遠忌通信



りあえず」「取りあえず」と言いながら人生が終わるかもしれませんが、それでよろしいのですかということです。

先ほどちょっとご紹介していただきました『同朋新聞』ですが、2年3ヶ月連載で書かせてもらいました。最終回の去年の12月号に、杉山平一さんという人の詩を紹介しました。この方は、一昨年97歳で亡くなられた詩人であります。なかなかユニークといいですか、いろいろな分野の詩を書いておられます。

若いころは、小津安二郎という映画監督がしばらくの間はみんなが理解してくれなかったわけですが、その映画を。その小津さんの映画がいかに素晴らしいかということも、ずいぶんこの杉山さんは当時から言っておられました。

この杉山平一という人が書かれた詩の中に「生」という詩があります。生きるという字を書いて「生」。どうい詩かという、こういう詩です。

「ものを取りに部屋へ入って
何を取りに来たか忘れて
戻ることがある」

ご経験がおありではありませんか。冷蔵庫を開けてしばらくの間眺めているけど、取りに来たのがケチャップだったかマヨネーズだったか分からないみたいな。

**ものを取りに部屋へ入って
何を取りに来たか忘れて
戻ることがある
戻る途中で
はたと思い出すことがあるが
そのときは素晴らしい**

**身体が先にこの世へ出てきてしまったのである
その用事は何であったか
いつの日か思い当たるときのある人は幸せである
思い出せぬまま
僕はすぞすぞあの世へ戻る**

こういう詩です。よくありますよね。隣の部屋へ何かものを取りに行った。用事は何だったっけとかいう。同じルートを通って帰ったら思い出すかもしれないなどと、いろいろ思ってしまうわけですね。

杉山さんは、あの世と言っていますけれども、どこか分かりませんけれども、どこかからこの世へ、私は何か用事があって来たわけです。人間に、この私に生まれてきた。その用事は何であったか、い

○ 御遠忌通信



つの日か思い当たるときのある人は幸せである。人生の用事は何だということですね。

先ほどもご紹介いただきましたように、私はしばらく京都の大谷中・高等学校というところで、こともあろうに校長先生を十四年もやることになりました。今から3年前、57歳のときに辞めたのです。3月に辞めました。だから、この3月で辞めて3年になります。

そんな14年も同じ学校の校長をやる人なんてめったにないのです。だいたい3年で変わるのです。そうすると、京都でも古い方から2番目か3番目ぐらいになる。そうすると、いろいろ役が当たります。

近畿の役が当たるとか、全国の役が当たる。最後の方になると、日本私立中学・高等学校連合会の常任理事というのに当たってしまっていて、毎月東京に行っていました。それはそれで、全国にいっぱい校長先生のお友達ができて楽しかったのですけれども。

最後の年の2月ぐらいだったと思います。会議の後に仲良し校長ばかり集まって雑談していたとき、「私もこの3月で退職することにしました」と私が言ったのです。そうしたら、「あんたは若いのに辞めるのか」と、そういう感じで雑談しているときに、ある校長先生が、「真城さん、知っているかもしれないけれどもな、校長が退職してから後、ぼける率が高いんやで」と言いました。「元校長というのはぼけやすい。気を付けや」と。

「あんたがぼけたらいかんから、忠告というかアドバイスするわ。退職してから後、大事なことが2つある。」「何ですか」と聞くと、「やっぱり、キョウイクとキョウヨウや」と言うのですね。えらい難しいことを言うなと思って、「そんなことですか」と言ったら、「今、あなたが思っているのと違う。『きょういく』は、『今日行くところがある』ということや。」もうお分かりかと思いますが、『きょうよう』は、『今日する用事』があるかということだ。」朝起きて、行くところもなければ、する用事もないと呆ける。幸いなことに今日皆さんは、「きょういく」も「きょうよう」もあったから、ここに今おられるわけです。

今日の用事ははっきりしている。では人生の用事はどうだということ。「身体が先にこの世に出てきてしまったのである。その用事は何であったか」。それがはっきりしないと、『取りあえず、取りあえず、取りあえず』。いっぺん、ちょっと自分でモニターしたら分かります。1日に何回「取りあえず」という言葉を使うか。多いですよ、日本人は。めちゃくちゃ多い。

男3人が集まって居酒屋に行ったら、「取りあえずビール」から始まるわけで、何でもそうです。今日たぶん、これが終わってからの片付けでも、「どこから片付ける?」、「取りあえずここから」。絶対そうです。私も偉そうに言っていますが、自分で振り返ったら、1日に何回取りあえずという言葉を使うかなと思いますね。取りあえず大好きです。

取りあえずは取りあえずで大事なのです。けれども、その先はないのかということなのです。あるいは、その取りあえずは、何のための取りあえずなのか、ということですね。健康は大事です。お金

○ 御遠忌通信



も大事です。家族が仲いいのも大事です。それで、どうするのと言われたときです。

健康になっても人に迷惑を掛けるということはないかもしれないけれども、今日本人が健康食品やサプリメントに使うお金を東北の復興に回せば、すごいものですよ。

今、日本人はサプリメントだけで1年間に1兆円以上お金を使っているのです。健康食品と合わせると、日本の健康食品、サプリア市場は3兆円市場と言われています。3兆円といたら、福島第一原子力発電所の1号機から4号機までを今建てたら2兆円掛かります。その1.5倍を、お肌の張りつやのためばかりではないかもしれないけれども、惜しげもなく使っている。それは悪いことではないけど、本当にそれが一番でいいのかなという感じですね。

あるいは、お金なんかはもっとはつきりしていますけれども、私が儲けるということは、そのお金は他の誰かのところには回らないということです。もし、世界中のお金を全部私が握っていたら、皆さんのところには行かないわけです。だから私は持たない。そういうわけではないですが。

宝くじもそうでしょう。私が当たったら、その分ほかの人の当たる確率は下がる。ほかの人の当たるのを邪魔している。先ほどの北野天満宮の話で、祈りが呪いかと言いましたけれども、我々がやっていることは、祈りのつもりが、他人が呪われることによって成り立つ。

【成功の裏側】

去年の夏だったと思いますけれども、東京のあるところへお話に行ったときに、ちょっと話を聞いてくださいとって来られた方がおられます。その方は経営コンサルタント、40代半ばです。自分でおっしゃっていました。私は現代社会の勝ち組です。ものすごい収入があるのです。

本当にやり手で、赤字でつぶれかかっている会社に頼まれて会社の再建をやるわけです。乗り込んでいって、帳簿を調べて、システムを見て。お宅は何でここの会社から部品を調達しているのですか。下請けを何でここにさせているのですか。

そこは親の代からの付き合いで、本当にいい部品を作ってくれるのです。ここの部品を使っていれば本当に心配ない、安心でレベルも高いんです。ただ、その分ちょっとお金は掛かるんですけどね、というようなときに、何を言っているんですか。自分の会社がつぶれるかどうかと言っているときにそれどころではないでしょう。第一、あなたのところの製品は8年持ったらいいんだから、こんなにいい部品を使わなくても十分です。インターネットで探したら、世界中から安い部品はいくらでも手に入る。早く切りなさい。

あなたのところはなんでこんなに正社員が多いのですか。半分もいららないですよ。3分の1にして、残り嘱託、パート、アルバイト。マニュアルさえしっかりすれば何でもないことです。

マクドナルドを見てください。どんな大きな店だって正社員なんか1人しかいないです。十分やれているではないですかとって、やるわけです。それは業績回復して、黒字財政になるかもしれませ

○ 御遠忌通信



ん。なるでしょう。その人はそれで次々と成功してきているのです。

それで高級マンションに住んで、わが世の春を謳歌してきたのだけれども、あるときから、これでいいのだろうかと思い始めたというわけです。それは何かというと、自分の仕事が成功すればするほど泣いている人の数が増えていくというのです。下請けが切られるわけです。あるいは正社員だったのが、嘱託3年契約、5年契約、1年契約にされてしまう。

そういうことを今までは、自分は現代の最先端でうまいことやっていると信じていた。手応えを感じながら、これだと思っている人たちが、今ちょっと、本当にこれでいいのだろうかと思い始めているのですね。

その後、証券会社の方も来られて、その方もよく似た話です。本当にやり手で、お客さんに勧めた儲け話がほとんどことごとく当たって、お客さんにもうけてもらって、自分も成功報酬をいっぱいもらっているわけです。

けれども、こつこつと地面を耕してものをつくったり、工場でもものをつくったりというところから、バーチャルな、ブラウン管の前に座って、電話をかけて、コンピューターを触って、莫大なお金が一瞬の間に入ってくるようなところへ、どんどんみんなを追い立てていっているわけですから。自分のやっている仕事は本当にいいのだろうかと思い始めたという方が、何人か来られたうちの、最初の二人はそういう話でしたね。

今、本当にそういうところへ差し掛かってきて、少し気付き始めたということも、ちょっと出てきているなと思います。我々が本当に大事なことが何なのか。

そういうときに、お浄土とはどういう世界なのか。私たちはどういう世界を目指して、どういうことになったらいいなと思いながら生きていけばいいのか。あるいは、このお浄土のもととは本願ですね。根本的な願いです。あるいは本尊、如来様、阿弥陀様。こういうことに触れることで、忘れかかっていた大事なことを取り戻していく。

それと、私たちがどういうものとして今生きておるのか。この私というのはどういう人間なのかということを知らないまま、人生終わっていいのでしょうか、ということをおもっていただきたいわけでありませう。

【こころの鏡】

今日は御遠忌の讃仰講演会で豊橋別院にお参りに行かねばならん。今朝起きてから完璧な化粧をして、昨日の晩から何を着ていくかいろいろ考えて、タンスを開けたら思いがけないものがいっぱい出てきて、元に戻らなかつたりするわけですがけれども。これから死ぬまで1つも買わなくてもあるなと思ったり。それでも買うわけですがけれども。

鏡を見てチェックをするわけでしょう、外見を。これで完璧と思って家を出ようとした瞬間に、そ

○ 御遠忌通信



うだそうだ、昨日寝る前に、豊橋別院に行く前にあそこを片付けてから行かないといかんなと思っていたことを、ふと思い出して、時間はあまりない。

大急ぎでぱたぱたと片付ける。身だしなみの最後の点検をする間もなく家を飛び出して、豊橋駅で降りて、歩いている最中でお友達のお同行に出会って、「こんにちは、今日はお天気がよくて、あまり寒くなくてよかったね」というような話をしている間に、出会った方が、「服に白い粉が付いているけどどうしたの」とか言ってくると、「さっきちょっとぱたぱたして、その時ついたのでしょうか。」「ああ、そう、本当。ありがとう」と言って、直す。「よく見たらほつたにも何か付いているよ」。そうしたら、コンパクトを出して、また直す。そのときに、「よく言ってくれたね、ありがとう。恥をかくところだった。よく言ってくれました、ありがとうね」と言いますよね。

もしそれが、出会ったお友達から、「奥さん、今日はどうしたの。えらい心が汚れているけど」と言われたら、今にここにことなんか絶対座ってはいられないです。少なくとも今晚一晩は寝られないでしょう。「なんで私があの人にそんなことを言われたいといけけないの。あの人私にそんなことを言う権利とかあるわけない。あの人の方がもっともっとどす黒くて濁っているはずなのに」と思うわけです。絶対に受け入れられない。

外見より中身が大事、見掛けより心が大事と口でも言い、心でも思っておりながら、外見のことを言ってもらったらありがとうと言うのに、心のことを指摘されたら、絶対に受け付けられないのがわれわれです。

では、私たちはいつ、どこで、どうやって自分を知ることができるのか。自分でも見たくないけれども、私はどういうものなのだろうかを問わねばなりません。そういうことのために、我々の先輩方が定期的に、鏡の前でと同じぐらいの回数お内仏の前に座る意味があるよということでもありますね。

【相応の対価】

親鸞聖人が人生をどう生きるかということはずっと求めながら、比叡山で20年間を過ごされたわけですが。現代社会もそうなのですけれども、人間の知恵が考える世界というのは、どうしても、できたら、あるいは成し遂げたら認められるという考え方が思い付かないのです。

できる間はいいけれども、できなくなったらどうしよう。私たちはだんだん年を取るわけです。昨年、ここまで上がった手が、今年ここまでしか上がらなくなりました。いろいろと機能が十分ではなくなってくる。つまり、できるということで価値を見られると、自信がなくなっていく。何を成し遂げたかということで価値が見られていくというのが現代社会。

現代社会だけではありません。親鸞聖人の時代の比叡山もそうです。学問を積んだら、修業を成し遂げたら、戒律をきちっと守って生活ができたなら、こういう話ですね。その1つ手前の前提としては、私たち、今でもそう思っていますけれども、何かを手に入れようと思ったら、それにふさわしいだけ

○ 御遠忌通信



のことをしないとイケないはずだ。対価を払うというか負担を負うというか。こう思っていますね。

例えば、ジュースを1本手に入れようと思ったら120円払わないとイケない。それが500ccだったら150円、もうちょっと高いものだったら、それ相応の対価を払わなければイケない。自動車一台買おうと思ったら、腹をくくらないとイケない。家を1軒求めようと思ったら、預金残高を上げていかないとイケないとなるわけですね。

あるいは、人からいい人と言われたいと思ったら、少なくとも人の見ている前ではいい人を演じていかなければならない、私のように。みたいな感じになっていくわけです。あるいは就職したいということであれば、学歴であるとか、資格であるとか、就職先とのコネであるとか、いろいろなことがある。ただ、ぼーっとして待っていても駄目だぞ。何かしないとイケないはずだ。

先ほどの北野天満宮でもそうですが、いくら祈りの力は純粹だといっても、まさか受かりそうもない孫が受かるようにと頼むのに、賽銭も入れないということは絶対はないというか、虫が良過ぎると思うではないですか。

つまり、そういうふうになんかを得るには相応の対価を払わなければならないという考え方は、当たり前のように我々は思っているわけです。逆にというか、意地悪く言えば、払えない人は手に入りませんよということです。つまり、できたら認められる、成し遂げたら認められるという世界ですね。

親鸞聖人も比叡山で20年間、この相応の対価という、先ほど言いましたように、家を1軒求めようと思ったら、それと等価交換できるだけの預金残高を積み上げていかなければならない。それがここまで行ったら交換できるという話でしょう。

そんな言葉はありませんけれども、比叡山で親鸞聖人は、学問残高を積み上げていき、修業残高を積み上げていき、それがそこそこ積み上がったからお坊さんの位が上がったり資格が取れたり、あるいは大きな寺の住職になれると思込んでいるわけですね。そういうものだ。だから頑張らないとイケない。だから学問しないとイケない、だから修業しないとイケない。

親鸞聖人は法然上人にお出遇いになられて初めて、念仏生活になったわけではないのです。親鸞聖人の比叡山は念仏僧としての20年間です。常行堂の堂僧をしておられたぐらいですから。常行三昧といったら念仏行のことです。90日間念仏を唱え続けながら歩くのが常行三昧ですね。

ただ、法然上人にお出遇いになられて、念仏の中身がまったく違ってくるのですね。それまでの念仏は相応の対価としての念仏なわけです。念仏を行として積み上げていく。

親鸞聖人は比叡山で徹底的に学問しておられるわけですから、法然上人がおっしゃることはすべて、知識としてはご存じのことばかりです。ところが、頭では分かったおつもりでありましようけれども、法然上人に出遇いになられて、法然上人から教えを聞き、また法然上人がそこに教えを聞きに来られている方々と対面し、話を聞き、あるいはそれにアドバイスをしている様子、あるいは法然上人の生活そのものをつぶさにご覧になって、親鸞聖人は阿弥陀如来という仏さまのご本願というものを、今

○ 御遠忌通信



まで乱暴に言えば、見くびっていたとか、本気にしていなかったとか。つまり、頑張れるだけ頑張りますよ。足らなかつたら助けてくださいというようなことが、常識的な感覚ですね。

【分からない私というところに立つ】

親鸞聖人は比叡山での20年間も含め、自分自身の29年間をずっと振り返ってみたときに、自分がいかに悟りとか、救いとか、仏の境地とか、そういうものと遠いか。あるいは、自分はそのに行けるような自分ではないということ、つくづくと身に染みて痛感されておられた。

我々は、聞法してできるだけ分かったことを増やしていこうと思っているわけです。そうではないのです。分かったことがいくら増えても駄目ということはないのですけれども、そこがポイントではない。



「分かる」というのは、実際に分かるのではないのです。「分かると思う」ということです。思っただけなのです。無量不可思議の仏さまの世界の話を、限りのある私たちが分かるわけがないのだから。その、「分からない私」というところに立つことができるかどうかなのです、とっても大事なことは。

もう一つ、その前に、自分は、できたら認められる、成し遂げたら認められる、相応の対価を払えば手に入れられるというような世界では、どうにもならないということがはっきりしてしまつたら、もう阿弥陀さまのご本願にすぎない。

それは、こっちからすぐと思っていたけれど、仏さまの方から、そうしたいとか、助けたいというのに出遇った。つまり、こっちが阿弥陀さまを拝んでいるつもりだったけど、拝んでみたら、阿弥陀さまの方が私を尊んでくださっておつたというようなことですね。そういうご本願というものに出遇われていくわけですね。

【無条件肯定の世界】

それまでの、できたら認められる、成し遂げたら認められるということに対して、本願という世界は、あらゆるいのちの無条件肯定、存在そのものが何の条件も付けずに尊いと認められるということ

○ 御遠忌通信



です。仏さまは、できたかできないか、成し遂げたかどうかなんていうことは一切問わない、条件にしない。どのいのちの、どの瞬間も尊いと認めてくださる。何の条件も付けずに。ここまで来たら助けてやる。60点取ったら助けてやる。わしの言ったことを裏切らなかつたら助けてやるというのとは違うということです。無条件ですからね。

我々は全部条件付きです。こういう世界に触れてみると、私たちがいかに狭いところでものを見、分かったつもりになっておるかということも明らかになってくるわけです。

蓮如上人が私たちに、親鸞聖人のたくさんお書きになられた膨大な書物の中から『正信偈』を勧めてくださった。その『正信偈』の第1行目はご存じのとおり、「帰命無量寿如来」。漢文で漢字ばかりで書いてあるから、親鸞聖人のお言葉に触れよと言ったって、難しくて分からないじゃないかと思うかもしれませんがけれども、眺めるだけでも眺めてください。

そうしたときに、親鸞聖人は『正信偈』の一番最初を、なんで「帰」という字から始められたのだろうか。その次の「命」という字はどういう字なのだろう。次に、仏さまは無量だと。仏さまの世界は無量だと。

「無」といったら、「そうではありません」でしょう。そうではありませんというのが無ということでしょう。ということは、仏さまの世界は「量」ではありませんということです。量ではありませんというのが仏さまの世界であるとするならば、逆に言えば、我々の世界は量の世界です。量に引きずり回される世界が、われわれの世界です。

先ほど自分をどうやって知るかという話をしました。量ということは数字になるということです。今自分が何に関心があるかということが、例えば数値という言葉で何を思い浮かべるかが、みんな違うのですね。

預金残高と思う人もいれば、血糖値だと思う人も、血圧だと思う人も、体重だと思う人もいます。孫の偏差値だと思う人もいます。いずれにしても、いったん数字になれば、いかにわれわれがそれに引きずられ振り回されるか。そんなことはないですか。

血圧でも知らなかつたら幸せだったのに。体重でも気にし始めるとそればかり気になる。ダイエットには気にするのが大事なのです。体重計に乗って気にするだけでも体重は減りますよという話がありますけれども、それはそれでいいのかもしれませんが、とにかく、数字になった途端に気になって、気になって、どっちが多いのか、増えたか、減ったか。

例えば今二月ですけども、3月になって終業式があつて、子どもが学校から帰ってくる、終業式の日。その日に小学校に行っているうちの子は、学校で嫌なこと、つらいことがあつてもじっと我慢した。今日帰ったらお母さんに、学校であつたことを聞いてもらいたいなと思ひながら、とぼとぼと帰る。

玄関の扉を開けて、「母さん、ただいま」とぼそつと言う。どうも聞こえなかつたらしいから、もう

○ 御遠忌通信



一回、「お母さん、ただいま」と大きな声で言ったら、お母さんが出てきて、「お帰り。」「お母さん、今日ね、あのね」と子どもが言いかけた途端にお母さんが、「そうそう、今日は終業式でしょう。早く通知票を出しなさい」と、こうなる。

そうすると、お母さんは私そのものよりも、私が取ってくる数値の方が関心が深いのだなというふうに、子どもに思わせてしまうというようなことが、いくらでもあるのです。ご主人を見る目でもそうではないですか。このごろ振り込みだから余計あるかもしれません。

まだ、奥さんは分かっているから、家にいるときはぐうたらだけど、この人の稼ぎでうちの家庭は成り立っていると思っているけど、そういうことにぴんと来ていない子どもたちからすれば、ただのぐうたらなおっさんが家の中でごろごろしているというだけの話になってくる。

そういうのを人材というのです。材料ですから。材料は、見る人によって価値付けが変わります。会社の社長から見たら、こんないい人材はいないという人が、会社で褒められ続けます。あんたは偉いわ。あんたみたいな人だったら幾ら給料を払っても惜しくないわと社長に言われたら、必死で頑張るでしょう。

そうすると、家に帰ったころは絞りカスみたいになっているわけですよ。奥さんから見れば、うちの亭主はぐうたらぐうたらしてという感じになる。恐ろしい川柳があって、「粗大ごみ、朝に出しても夜帰る」。

奥さんはそれでもまだ、この人の給料で成り立っているとまだ分かっているのですが、そこの家の娘がつくった川柳はもっと怖い。「ランキング、母子犬猫父金魚」。妻にばかにされ、娘にばかにされ、イヌにばかにされ、ネコにばかにされ、金魚にだけ威張っているお父さんね。

というように、見る人にとって、この人はこれができるから値打ちがある。これをしてくれるから値打ちがある。こういうふうに見るわけです。奥さんから見ても、娘から見ても、どうしようもないお父さんと思っている人が、日曜日に隣の奥さんに、「ご主人、ちょっと手伝ってくださいませんか」とか言われたら、元気になって行ったりするわけです。そうしたら隣の奥さんからは、「お宅のご主人はいい人ね」と言われたりするわけです。

人材、材料というのは、見る人にとって都合がよければ認められるという世界ですね。それも含めて、私たちは量の世界で振り回されているということ、仏さまの世界は無量ということで教えてもらうわけです。

【「分かりません」が、エネルギー】

あるいは、「南無不可思議」というのは、簡単に言えば分かりませんということです。「分かっている私である」というのが真宗門徒のエネルギーなのです、実は。時間の関係もあって極端な話をしていますけれども、真宗門徒というのは、「私」の前に「分かっている」が付くのです。

○ 御遠忌通信



私たちがご本尊さまの前に身を置き、親鸞聖人のお言葉に触れ、あるいはお浄土というもののいわれや様子のお話を聞かせてもらおうと、いかに私は分かっていない私であるかということが、どんどんと明らかになってくるのです。どこまで行っても分かっていない。

だいたいそうなのです。分かったというのは、私に分かる容れ物というのは狭くて小さいのです。その狭くて小さい容れ物の中に収まったときに、我々は分かったと言います。

それと、人と話しているときに「分かった」というのは、「もうやめましょう」ということです。そんなことはないですか。私なんかよくあります。例えば、母親と話していて、ちょっと私が何かを母親に聞くわけです。そうすると、その聞いた話の答えにとどまらず、何から始まっているかがだんだん分からなくなって、どこまでも話が広がっていきとうとしますね。どこかで止めないといけないうよう。

そのとき何と言うかというと、「もう分かった」と言うわけですが。それでもまだ話そうとしたら、「分かってる」と言います。つまり、ケリを付けたい、分かったことにして早くそこから立ち去ってしまいたい。

そうではないのです。分からないというのをずっと保つのは大変ですけれども、問いを保ったまま、いつも分かりたい、もっと知りたい、もっと話を聞きたい。そういうふうになっていくのですね。それもこれもみんな、本願との出遇いによってということになっていくのです。

本当のことに出遇ったら、自分がいかに本物に生きていないかというか、分かっていないのに分かったふりをして生きているかを知らされる。いい人間ではないのに、いい人のふりをして生きている。こうやって偉そうに言っていますけど、全部自分に当てはまるなと思いますね。

【まず認める世界】

つまり、できたら認められるに対して、本願の世界は、まず認めるという世界なのです。できるもできないも問わない。子育てや学校教育で言えば、子どもをまず認めるということです。出来がいいとか悪いとか関係ないです。まず認める。そういう点では、じいちゃん、ばあちゃんがものすごく大事なのです。

親はやっぱり、子どもを出来る子にしないとイケないでしょう。いい加減に育てるわけにはいかんというのがあるではないですか。だから、悪いことをしたときには本気で叱って、勉強ができなかったら腹が立ってしょうがない。

じいちゃん、ばあちゃんね、孫がよかろうが、悪かろうが、かわいいではないですか。これが大事なのです。私も校長先生という立場になって初めて気が付きましたけれども、校長先生というところから見ると、生徒は孫なのです。

担任は、自分より年上でも校長の子どもなのです。わが子なのです。私が校長になったとき四十三

○ 御遠忌通信



歳ですから、私の高校時代の担任の先生がまだ現職でいたのです。クラブの顧問もいて、やりにくいことこの上なかったですよ。だけど、その人たちが、わが子のような感じがするのです。先生、それは困るわという感じになるのです。

その次の生徒たちは、いいことをしようが、悪いことをしようが、かわいくてたまらないのです。だから、あんなやつは退学にしろとか、許したらいかんとか、議論になっているときに、そう言うなよという感じになるのです、本当に。そういう目というのが、じいちゃん、ばあちゃんのそういう目が大事なのです。

つまり、できる・できない、やった・やらないということ、何を成し遂げたかというようなことを問わずに、まず認める。まず大事なおまえや。かわいいおまえや。おってくれるだけでいいというようなものが先にあって、学校教育で言えば、その上で、あんたが大事だからこそ、いい加減に育てもらうわけにはいかないのだというところに行くわけです。

大事なあなたであるから、才能や能力や資質を埋もれたままにしておいてもらうわけにはいかないのだ。我々の責任でできるだけ、あんたから引っ張り出さないといけないのだ。あんたも自分でそのことをやりなさい。そういう順番なのです。

だけど、世のなかには、できたら認めるわけです。成し遂げたら。これがまた、場合によったら、先生が思ったとおりにできたらということになるわけです。思ったとおりにできないやつが、腹が立って体罰になったり、いろいろになるわけです。まったくものの見方、価値観と違いますか、尊いものの順番がひっくり返るのですね。

『正信偈』の始めの方に、「無」とか「不」とかで始まる、仏さまのことを表す言葉が幾つか出てきます。今の「帰命無量寿如来 南無不可思議光」。赤いお経本で言うなら、3ページ目の3行目から。「普放無量無辺光 無碍無对光炎王」とありますね。仏様の世界は「無量」「無辺」「無碍」「無对」です。「無」と「不」の付いているものだけ書きますと、もうちょっと行ったら「不断」、「無称」。例えば、こういうふうに出てきます。

先ほどから言っているように、この「無」を取った残りが私たちの姿なのです。私たちが量ばかり気にして、増えたか、減ったか、どっちが多いかという。あるいは日々理屈で、説明で分からないと、分かったことにならないといえますか、納得できないという。今すぐ分かりたいのですね、今すぐ分かりたい。

聞法は分からないといけないと思ひ過ぎない方がいいです。聞法は、あまり私が言うのもあれですが、聞法して分かるか分からないかは大きな問題ではないのです。聞法の一番大事なことは、聞法する場へ行くということなのです。今日の私の話が分かる、分からんはどうでもいいです。ここへ来られただけで九割はオーケー。そういうことなのです。分かっても分からんでも聞ける場へ足を運び続ける。

○ 御遠忌通信



いつ分かるのか。子どもたちも言います。「先生、この勉強をしたら何になるの」。それを説明したらいかんと私は先生方に言っていたけど、先生方は説明したくてたまらんから、「これは世のなかで、こういう必要がある」と言うのだけど、言えば言うほど、その必要がなくなったらその子は勉強しないのです。

そのときの答えは一つです。「いずれ分かる」。これだけです。いずれ分かるとしか言いようがない世界ですね。ですから、ここでいっぱいいろいろなことを教えられます。

【廣大無辺の世界】

阿弥陀仏を無辺光仏といいます。我々は、辺の中しか分からない。辺というのは外と中を区切る仕切りのことを辺というでしょう。1人ずつみんな辺が違うのですから。

自分の生まれた年代や、育った環境や、勉強してきたことや、聞いたことや、経験したことや、家族関係や、付き合いや、いろいろなことで一人ひとり、みんな辺が決まっていくのです。性別によっても違うのです。

ですから、同じことに出遇っても受け止めは違うのです。その人の辺の中に入るように翻訳しながら受け止めているわけです。そこのところを分かっていたら厄介です。

例えば、子どもが大きくなって高校へ行った。高校の国語の先生が、もう君もそろそろ読解力も付いたころだから、夏目漱石に挑戦してみたらどうだい。最初は、『吾輩は猫である』とか、『坊っちゃん』ぐらいから始めるといいかもしれないよ。読んでごらんと言ったときに、先生、『坊っちゃん』も『吾輩は猫である』全部読みました。私はもう夏目漱石は分かっていると、生徒がもし言ったとしましょう。

そのときにその生徒は、小学校のときに『少年少女文学全集』で読んでいるわけです。つまり、本当の夏目漱石には1回も触れたことがなくて、小学生の辺の中に収まるように書き換えたもので分かったつもりになったがために、もっと廣大無辺の世界に触れることができなくなってしまふ。

これはキリスト教の方の言葉ですけども、トマス・アクィナス



という人が、「人間を宗教から一番遠ざけるのは、幼いときの誤った宗教教育である」と言っている

○ 御遠忌通信



す。宗教とはこんなものだ。例えば、北野天満宮に行って一生懸命拜んでいる姿、あれが宗教だと思ったら、なんか本気でそれに付いていこうかなという感じとは違うでしょう。

そうではないということですね。私が分かっている範囲は知れているのだということです。分かったと思うことはたくさんあるでしょうけれども、それは実はほんの一部でしかないのだということです。

【無碍の世界～不都合に振り回されない】

あるいは無碍。思い通りに進むのを邪魔するもののことを碍といいます。簡単に言えば不都合ということです。無碍というのは碍がなくなるということではありません。先ほどから言っているように、そうではありませんということです。碍の世界ではないということです。それはどういうことかという、出遇ったことがいつも都合がいいか悪いかでしか、われわれは判断しないわけです。

昔からの言い方で言えば、福は内、鬼は外ばかりしか思わない。都合のいいことはこっち。学力と順当であろうがなかろうが、合格は内、その分他人が落ちるという鬼（マイナス）は外。電気は都合がいいから内、発電のときに出てきた放射性廃棄物は外と思っていたら、その外がどこにもなかったということに最近気が付いて、どうしようという話になっているということです。

よく分からないけれども、北朝鮮や中国や、さまざまなことを考えたら基地はいるのだろうな。抑止力というか、防衛とか、国防ということは内だけど、基地は外だ。こういうのが我々です。本当にそうだとすることにどこで気が付くのかということです。

我々は、自分のやっていることそのものに気が付かないのですね。ですから、無碍というのは、「念仏者は無碍の一道なり」といいますけれども、この無碍というのは不都合がなくなるということではないのです。不都合に振り回されなくなるということです。

年を取るとするのは不都合でしょう。長生きはしたいけど機能は衰えたくないですね。年を取らずに長生きだけしたいという訳の分からないことを望むわけですがけれども、それは不都合だからですよね。不都合を遅らせたい。老化は遅らせないけれども、機能低下は遅らせたい、だから健康食品という話になるわけです。そうではなくて、好都合不都合という物差しから解放されると、年を取るという不都合だと思っていたことから教わる、学ぶ、育てられるという世界が無碍という世界なのです。

今まで不都合だということで瞬間的に駄目と思っていた、不都合から逃げ回っている人生が、逃げなくてもいい人生。出遇ったどのことから教えてもらうことがあり、育てられることがあり、気付かせてもらうことがある。

そういうふうに私たちが、例えば『正信偈』の最初の五ページぐらいの中でも、そのつもりでお言葉に触れれば、気が付くことがいっぱいあるのではないかな。そういうことを私たちの先輩方は、お内仏の前に1日1回は少なくとも座れよ。そこで『正信偈』のお勤めをなさい。親鸞聖人の言葉に触

○ 御遠忌通信



れてくれ。自分を知る、自分に気付く、あるいはほかの人との関係に気付いていくという、気付くということですね。

親鸞聖人はご自身のことを愚禿とおっしゃいますけれども、「愚」というのは知能が低いという意味ではありません。これは、気付いていないという意味です。自覚がない、気付いていないという意味です。自分がいかに滑稽な生き方をしているかということにひとつも気付いていない。

我々は他人の滑稽な生き方にはすぐ気付くわけです。自分がどんなわがままなことをやっても、それは全部ちゃんと弁解、言い訳が用意されています。それは言葉遣いの中にもすぐ表れる。自分が洗っていて茶わんが2つになったら、何と言いますか。「茶わんが割れた」と言うでしょう。人に洗ってもらっていたら、誰々が「茶わんを割った」と言います。

うちの家庭の中でもよくありますけれど、自分のせいで財布が見当たらない。そういうときは「財布がなくなった」と、勝手に消えたように言いますよね。それが人のせいだとはっきりしていたら、「誰々が財布をなくした」と言うわけです。そういうふうに、われわれはいつも自己防衛しながら、自分がいかにわがままな勝手な理屈で言い張って生きているかということに、ちっとも気付くことがない。

それが、ご本尊さまを真向かいにし、本当に尊い世界、あるいはお浄土という、われ人と共にという世界、開かれていくという世界。そういうようなことに触れて初めて、自分がどう生きているのか、どういう姿で生きているのか、今いるのか。あるいは、ほかの人たちとの関係がどうであるのかということに気付かせてもらったときに、これはもう「お恥ずかしゅうございます、本当に申し訳ない。頭の上がない生き方しか私はできませんわ」と言えるところになるわけですね。ごめんなさいしか言いようのない私であったということに、そこで気付かせてもらう。

ところが、そこで「南無阿弥陀仏」とお念仏した途端に、そういうあんだだということは、もう先刻承知の上であんたを救う手順は全部整っているよと、仏さまの方から手を差し伸べてくださっている。はたらきを掛けてくださっているということになる。

私が仏さまを尊ぶ前に、仏さまがこの私を尊いものであると、私を拜んでくださっておる、礼拝してくださっておる、尊んでくださっておったということに、気付かせてもらうということですね。

そういうことで私たちが、先輩方からどんな地域、日本中どこに行っても、人が住んでいるところにはお寺がある。家の中に仏間があって、ご本尊がお迎えされてある。そのことの願いといいますか、どういうことで私たちの先輩方は、家の中にご本尊をお迎えしてくださっているのかということが、どこかに行っていないか。

次にお坊さんが来るまではしばらくあるから、しばらくこのままでいいのと違うかみたいな感じで、最初にも言いましたけれども、衣を着た人が来たときのために必要な道具、設備というふうには、お内仏がなっていないか。

○ 御遠忌通信



私たちが生きるということを真剣に、逃げずに、顔を背けずにしようとしたときに、その指針といえますか、方向を教えてください、そういうとっても大事なものであるということですね。とにかく、気付くということです。

ですから、今すぐ分かって納得するということをあまり求めすぎないということです。この気付くということを重ねている間に、「ああ」と思うようなことが、人生の中でいろいろあるのではないでしょうか。

何十年も前に叱られたときの父親の言葉が、今ごろになって分かるということがありますよね。そういうことです。いずれ分かるということです。いろいろ生活してきて、嫌なこと、つらいことに出遇ったり、一緒に苦しんだり、いろいろなことがあった中で、今になってやっと分かった。やっと分かったというか、幾分分かる気が少ししてきたというような感じがあります。

そういうようなことを積み重ねていくために、私たちが手近なお手次のお寺にお参りをさせてもらい、聞法の機会があれば足を運び、毎日毎日はお内仏の前に身を置くということですね。そして、仏さまに聞いていくということです。

真宗門徒と言いますが、本当は真宗門徒と言うより親鸞門徒と言った方がいいかもしれないですね。つまり、親鸞聖人の門下生、門下の徒輩だということです、我々は。親鸞聖人を先生として生きていくということです。ということは、いろいろなことを親鸞聖人に尋ねていくということです。親鸞聖人のお書きになったもの、あるいは親鸞聖人の教えに触れて、感動されたり共感されたりした方々のお言葉に触れたりしながら、いろいろなことをとにかく親鸞聖人に尋ねていく、聞いていく。

親鸞門下の徒輩を門徒というわけですから、いろいろな場面で私たちがどうしなければならないかということは、すでに与えられているということでもあります。そこで、分かっていない私として聞き続けていき、求め続けていき、うなづくことがあれば、ああ、そうだなという。

それを自分だけのものにせずに、また語り合うということがとても大事なのです。私はこのように受け取っているのですが、それでいいのでしょうかねということ素直に出していくということが、とても大事なことになっていくということでもあります。

そんなことで、親鸞聖人が念仏一つということを法然上人から教えてもらった。その親鸞聖人のお言葉に触れ、灯を灯してもらった方々が、それは確かにそうなのだけれども、私たちはなかなか気付くということが少ないので、きっかけとしてお内仏の前に身を置き、お寺に身を運ぶということをするという伝統を、我々に残してくださっているということの意味というか、願いというものを、あらためて私たちは大事にする。

そこを、忘れていたなとか、そういうことだったのかということを確認することも、この御遠忌ということの大変大事な意味ではないのかなと思うことでもあります。

私の話は以上とさせていただきます。